

監修

高木市之助
久松潛一
山岸德平
小島吉雄

新訂 萬葉集

五

佐伯梅友校註
藤森朋夫校註
石井庄司校註

監修

高木市之助
山岸德平

久松潜一
小島吉雄

新訂
萬葉集
五

佐伯梅友校註
藤森朋夫校註
石井庄司校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

佐伯梅友（さへきうめとも）明治三十二年埼玉縣生。昭和三年京都大學國文學科卒業。東京大學教授。著「萬葉語研究」源氏物語新抄、古今和歌集等。

藤森朋夫（ふじもりともを）明治三十一年長野縣生。昭和四十四年歿。昭和四年東北大學國文學科卒業。東京女子大學教授。著「堤中納言物語新釋、萬葉集研究書誌」近大東文化大學教授。主著「堤中納言物語新釋、萬葉集研究書誌」近

石井庄司（いしむしやうじ）明治三十三年奈良縣生。昭和三年京都大學國文學科卒業。東京大學教授。著「國文學と國語教育」古典考

研究（記・萬葉）等。

日本古典全書

新訂 萬葉集 五 佐伯梅友・藤森朋夫・石井庄司校註

昭和三十年五月三十日初版發行

昭和五十年三月三十日新訂初版發行

昭和五十二年三月三十日第二刷發行

印刷所 凸版印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田區

有樂町・大阪市北區中之島・北九州

市小倉北區砂津・名古屋市中區榮

定價 一二〇〇圓

目次

本文

〔訓〕

卷第十八……………三

卷第十八……………一〇三

〔原文〕

四〇三 天平二十年春三月二十三日、左大臣橘の卿の使田

邊なべの史ふひと福曆ふくまろを越中の守大伴の家持が館に饗あへせし

時、新作し、并せて古詠を誦よみて、各心緒おののおもひを述

ぶる歌四首

四〇六 時に明日あしたを期もちりて、布勢ふせの水海みづうみに遊覽ゆうらんせむとし、

よりて懷おもひを述べて各おののお作れる歌八首

四〇四 二十五日、大伴の宿禰家持が、布勢の水海に往く

道中みちなかに、馬の上にして口號くちごうめる二首

四〇三 天平二十年春三月二十三日左大臣

橘卿使田邊史福曆饗越中守大伴家

持館時新作并誦古詠各述心緒歌四

首

四〇六 于時期之明日將遊覽布勢水海仍述

懷各作歌八首

四〇四 二十五日大伴宿禰家持往布勢水海

道中馬上口號二首

四〇四 水海に至りて遊覽せし時、各懷おのおのおもひを述べて作れる

歌六首

四〇五 掾久米の朝臣廣繩が館の宴に、田邊の史福麿を饗あへ

せる歌四首

太上皇おのすめらみことの難波なにはの宮に御在いましし時の歌七首

四〇六 左大臣橘の宿禰の歌一首

四〇七 御製のこと、和へたまへる歌一首

四〇八 御製の歌一首

四〇九 河内の女王かふちのおほきみの奏せる歌一首

四一〇 粟田あはたの女王おほきみの奏せる歌一首

四一一 御船、綱手もを以ちて江をさかのぼり遊宴したまひし時、

史福麿が傳へ誦める歌二首

四一二 後に橘に追ひて和ふる大伴の家持が歌二首

四一三 山上やまのうへの臣おみの、射水郡うづまやの驛館やの屋の柱しらに題し著け

たる歌一首

四一四 至水海遊覽時各述懷作歌六首

四一五 掾久米朝臣廣繩館宴饗田邊史福麿

歌四首

太上皇御在於難波宮時歌七首

四一六 左大臣橘宿禰歌一首

四一七 御製和歌一首

四一八 御製歌一首

四一九 河内女王奏歌一首

四二〇 粟田女王奏歌一首

四二一 御船以綱手も并江遊宴時史福麿傳誦

歌二首

四二二 後追和橘大伴家持歌二首

四二三 山上臣射水郡驛館之屋柱題著歌一

首

四〇六 四月一日、掾久米の朝臣廣繩が館にて宴うたげせる歌四

首

四〇七 先の國師の、館より京に入らむとし、飲饌うたげを設け

て饗宴せし時、主人大伴の家持が庭中の牛麥なでしこの花

を詠よめる歌一首

四〇七 大伴の家持が重ねて作れる歌二首

四〇七 三月十五日、越前の國の掾大伴の池主が來贈きこせた

る歌三首

四〇七 十六日、越中の守大伴の家持が報こたへ贈れる歌四首

四〇八 姑大伴氏の坂さかのうへ上の郎女いらつめの、越中の守大伴の家持

に來贈きこせたる歌二首

四〇八 大伴の家持が報こたふる歌二首

四〇八 また別に所心の歌一首

四〇八 天平感寶元年五月五日、東大寺の占譽地使の僧平

榮を饗かみせし時、守大伴の家持が酒を送る歌一首

四〇六 四月一日掾久米朝臣廣繩館宴歌四

首

四〇七 先國師從館欲入京設飲饌饗宴時主

人大伴家持詠庭中牛麥花歌一首

四〇七 大伴家持重作歌二首

四〇七 三月十五日越前國掾大伴池主來贈

歌三首

四〇七 十六日越中守大伴家持報贈歌四首

四〇八 姑大伴氏坂上郎女來贈越中守大伴

家持歌二首

四〇八 大伴家持報歌二首

四〇八 又別所心歌一首

四〇八 天平感寶元年五月五日饗東大寺占

譽地使僧平榮時守大伴家持送酒歌

四〇六 同じき九日、諸僚、少目秦の伊美吉石竹が館に會

ひて飲宴せし時、百合の花縷を造り、賓客に捧げ
贈りて、各この縷を賦する歌三首

四〇九 十日、大伴の家持が、ひとり幄のうちにゐて、遙

かにほととぎすの鳴くを聞きて作れる歌一首短歌
并せたり

四〇三 英遠の浦に行きし日に作れる歌一首

四〇四 天平感寶元年五月十二日、守大伴の家持が越中の

國の館にて陸奥より金を出せるを賀く詔書の歌一
首短歌并せたり

四〇六 芳野の離宮に幸行さむ時と儲けて作れる歌一首短

歌并せたり

四〇二 十四日、大伴の家持が、京の家に贈らむために、

眞珠を願ふ歌一首短歌并せたり

一首

四〇六 同九日諸僚會少目秦伊美吉石竹館

飲宴時造百合花縷捧贈賓客各賦此
縷歌三首

四〇九 十日大伴家持獨居幄裏遙聞霍公鳥

喧作歌一首并短歌

四〇三 行英遠浦之日作歌一首

四〇四 天平感寶元年五月十二日守大伴家

持於越中國館賀陸奥出金詔書歌一
首并短歌

四〇六 幸行芳野離宮時儲作歌一首并短歌

四〇二 十四日大伴家持爲贈京家願眞珠歌

一首并短歌

四二六 十五日、大伴の家持が、史生尾張オノの少昨オノを教おしへ諭さしな

す歌一首短歌并せたり

四二〇 十七日、大伴の家持が、先の妻めづの、夫おとこの君きみの使を

待たず、みづから來りし時の歌一首

四二二 二十三日、大伴の家持が橘の歌一首短歌并せたり

四二三 二十六日、大伴の家持が、庭中の花を詠よめめて作れ

る歌一首短歌并せたり

四二六 掾久米の朝臣廣繩が、天平二十年に、朝集使に附

きて京に入り、天平感寶元年閏五月二十七日に本

任に還りし時、守大伴の家持が作れる歌一首短歌

并せたり

四二九 ほととぎすの歌一首

四三〇 二十八日、大伴の家持が、京に向ひて、貴人を見、

また美人に相あひて飲宴こんげんせむ日のために、懷を述べ

て儲けて作れる歌二首

四二六 十五日大伴家持教諭史生尾張少昨

歌一首并短歌

四二〇 十七日大伴家持先妻不待夫君使自

來時歌一首

四二二 廿三日大伴家持橘歌一首并短歌

四二三 二十六日大伴家持詠庭中花作歌一

首并短歌

四二六 掾久米朝臣廣繩天平二十年附朝集

使入京天平感寶元年閏五月二十七

日還本任時守大伴家持作歌一首并

短歌

四二九 霍公鳥歌一首

四三〇 二十八日大伴家持爲向京見貴人及

相美人飲宴日述懷儲作歌二首

四三三 六月朔日の晩に、守大伴の家持が、たちまちに雨

雲の氣を見て作れる歌一首 短歌一絶

四三四 四日、大伴の家持が、雨の降れるを賀く歌一首

四三五 七月七日、大伴の家持が七夕の歌一首短歌并せた

り

四三六 越前の國の大掾大伴の池主が來贈^{おこ}せたる戲れの歌

四首

四三三 更に來贈せたる歌二首

四三三 天平勝寶元年十二月、大伴の家持が、雪月梅の花

を詠^よめる歌一首

四三五 少目秦の伊美吉石竹が館^{うんげ}の宴に、守大伴の家持が

作れる歌一首

四三六 同じき二年正月二日、國の廳にして饗を諸郡司に

給ひし時、大伴の家持が作れる歌一首

四三七 五日、判官久米の朝臣廣繩が館に宴せし時、大伴

四三三 六月朔日晚頭守大伴家持忽見雨雲

氣作歌一首 短歌一絶

四三四 四日大伴家持賀雨落歌一首

四三五 七月七日大伴家持七夕歌一首并短

歌

四三六 越前國大掾大伴池主來贈戲歌四首

四三三 更來贈歌二首

四三三 天平勝寶元年十二月大伴家持詠雪

月梅花歌一首

四三五 少目秦伊美吉石竹館宴守大伴家持

作歌一首

四三六 同二年正月二日於國廳給饗諸郡司

時大伴家持作歌一首

四三七 五日判官久米朝臣廣繩館宴時大伴

の家持が作れる歌一首

四三 二月十一日、守大伴の家持が、たちまちに風雨起

りて、辭去することを得ずて作れる歌一首

卷第十九……………二元

家持作歌一首

四三 二月十一日守大伴家持忽起風雨不

得辭去作歌一首

卷第十九……………一三

四三元 天平勝寶二年三月一日の暮に、桃李の花を詠める

歌二首

四四一 翻かひび翔しやうる鳴なを見て作れる歌一首

四四二 二日、柳やなぎ 黛まゆみを攀よぢて京師みやこを思しのふ歌一首

四四三 堅かた香か子こ草さの花を攀よぢ折しる歌一首

四四四 歸かへる雁かりを見る歌二首

四四四 夜のうちに千鳥の鳴くを聞く歌二首

四四四 曉あけに鳴く雉きしを聞く歌二首

四四五 遙はるかかに江えを浜まかほる船人うねの唱うたを聞く歌一首

四五三 三日、越中の守大伴の宿禰家持が館うたげに宴うたげする歌三

四三元 天平勝寶二年三月一日之暮詠桃李

花歌二首

四四一 見翻翔鳴作歌一首

四四二 二日攀柳黛思京師歌一首

四四三 攀折堅香子草花歌一首

四四四 見歸鴈歌二首

四四四 夜裏聞千鳥喧歌二首

四四四 聞曉鳴鳩歌二首

四四五 遙聞浜江船人唱歌一首

四五三 三日越中守大伴宿禰家持之館宴歌

首

四二五 八日、白き大鷹を詠める歌一首短歌并せたり

四二五 八日詠白大鷹歌一首并短歌

四二五 鷗を潜くる歌一首短歌并せたり

四二五 潜鷗歌一首并短歌

四二五 澁溪の崎を過ぎて巖の上の樹を見る歌一首

四二五 過澁溪崎見巖上樹歌一首

四二六 世間の常無きを悲しむる歌一首短歌并せたり

四二六 悲世間無常歌一首并短歌

四二六 かねて作れる七夕の歌一首

四二六 預作七夕歌一首

四二六 勇士の名を振ふことを慕ふ歌一首短歌并せたり

四二六 慕振勇士名歌一首并短歌

四二六 ほととぎすと時の花とを詠める歌一首短歌并せたり

四二六 詠霍公鳥并時花歌一首并短歌

り

四二六 家婦が京にいます尊母に贈らむために、詠へら

四二六 爲家婦贈在京尊母所詠作歌一首并短歌

えて作れる歌一首短歌并せたり

歌

四二七 二十三日、ほととぎすを詠めて作れる歌二首

四二七 二十三日詠霍公鳥作歌二首

四二七 京の丹比の家に贈れる歌一首

四二七 贈京丹比家歌一首

四二七 二十七日、筑紫太宰の時の春の苑の梅の歌に追ひ

四二七 二十七日追和筑紫太宰之時春苑梅

て和ふる一首

歌一首

四七五 ほととぎすを詠める歌二首

四七五 詠霍公鳥歌二首

四七六 四月三日、越前の判官大伴の池主に贈れるほとと

四七六 四月三日贈越前判官大伴池主霍公

ぎすの歌。感舊の意に勝へずて懷を述ぶる歌一首

鳥歌不勝感舊之意述懷歌一首并短

短歌并せたり

歌

四七八 ほととぎすを感づる情に飽かずて、懷を述べて作

四七八 不飽感霍公鳥之情述懷作歌一首并

れる歌一首短歌并せたり

短歌

四八〇 四月五日、京師より贈り來れる歌一首

四八〇 四月五日從京師贈來歌一首

四八一 山吹の花を詠める歌一首短歌并せたり

四八一 詠山振花歌一首并短歌

四八二 六日、布勢の水海に遊覽して作れる歌一首短歌并

四八二 六日遊覽布勢水海作歌一首并短歌

せたり

四八三 九日、鵜を越前の判官大伴の池主に贈れる歌一首

四八三 九日贈水鳥越前判官大伴池主歌一

短歌并せたり

首并短歌

四八四 ほととぎすと藤の花とを詠める一首短歌并せたり

四八四 詠霍公鳥并藤花一首并短歌

四八五 更に、ほととぎすの鳴くことの晩きを怨むる歌三

四八五 更怨霍公鳥晡晩歌三首

首

四二七 京人に贈れる歌二首

四二九 十二日、布勢の水海に遊覽し、藤の花を望み見て、

各懷おののおもひを述ぶる歌四首

四〇三 ほととぎすの鳴かざるを恨むる歌一首

四〇四 攀よぢ折れる保寶葉ほほうはを見る歌二首

四〇六 守大伴の家持が、月光を仰ぎ見る歌一首

四〇七 二十二日、大伴の家持が、判官久米の廣繩に贈れ

るほととぎすの怨恨うらみの歌一首短歌并せたり

四〇九 二十三日、掾久米の廣繩が、家持に和よへて作れる

歌一首短歌并せたり

四三一 五月六日、大伴の家持が、處女墓をとめの歌に同なふる一

首短歌并せたり

四三三 京の丹比の家に贈れる歌一首

四三四 二十七日、大伴の宿禰家持が、賀南の右大臣の家

の藤原なかつの二郎はが慈母ははを喪うしなへるを弔とぶらふ挽歌一首短歌

四二七 贈京人歌二首

四二九 十二日遊覽布勢水海望見藤花各述

懷調四首

四〇三 恨霍公鳥不喧歌一首

四〇四 見攀折保寶葉歌二首

四〇六 守大伴家持仰見月光歌一首

四〇七 二十二日大伴家持贈判官久米廣繩

霍公鳥怨恨歌一首并短歌

四〇九 二十三日掾久米廣繩和家持作歌一

首并短歌

四三一 五月六日大伴家持同處女墓歌一首

并短歌

四三三 贈京丹比家歌一首

四三四 二十七日大伴宿禰家持弔賀南右大

臣家藤原二郎之喪慈母挽歌一首并

并せたり

四三七 霖市なみめの晴るる日に作れる歌一首

四三八 漁夫の火光を見る歌一首

四三九 六月十五日、萩はぎの早花わさばなを見る歌一首

四四〇 大伴氏の坂上さかのうへの郎女いらつめが、京師みやこより女子むすめの大嬢おほいらつめ

に來賜きこせたる歌一首短歌并せたり

四四一 九月三日、宴うんげの歌二首

四四二 吉野の宮に幸いさしし時、藤原の皇后の作りたまへる

歌一首

四四三 十月十六日、朝集使少目秦の伊美吉いみけが石竹いはなけを錢はなむけ

せし時、大伴の家持が作れる歌一首

四四四 十二月、大伴の家持が、雪の日に作れる歌一首

四四五 三形みかたの沙彌さみの、左大臣に贈れる歌二首

四四六 天平勝寶三年正月二日、降れる雪殊に多し。守大

伴の宿禰家持が館うたげにて宴うたげせる歌一首

短歌

四三七 霖市晴日作歌一首

四三八 見漁夫火光歌一首

四三九 六月十五日見芽子早花歌一首

四四〇 大伴氏坂上郎女從京師來賜女子大

嬢歌一首并短歌

四四一 九月三日宴歌二首

四四二 幸吉野宮時藤原皇后御作歌一首

四四三 十月十六日錢朝集使少目秦伊美吉

石竹時大伴家持作歌一首

四四四 十二月大伴家持雪日作歌一首

四四五 三形沙彌贈左大臣歌二首

四四六 天平勝寶三年正月二日零雪殊多守

大伴宿禰家持館宴歌一首

四三〇 三日、介内藏の忌寸繩麻呂が館にて宴樂せし時、

大伴の家持が作れる歌一首

四三一 同じき日、掾久米の朝臣廣繩が作れる歌一首

四三二 遊行女婦蒲生の娘子の歌一首

四三三 同じき日、酒酣にして、更深け鶏鳴くに、内藏の

伊美吉繩麻呂が作れる歌一首

四三四 守大伴の家持が和ふる歌一首

四三五 太政大臣藤原の家の縣の犬養の命婦の、天皇に奉

れる歌一首

四三六 死ぎにし妻を悲しび傷む歌一首短歌并せたり

四三七 二月二日、判官久米の廣繩、正税帳を以ちて京師

に入らむとす。よりにて大伴の家持が作れる歌一首

四三八 四月十六日、大伴の家持が、ほととぎすを詠める

歌一首

四三九 春日にて神を祭りし日、藤原の太后の、入唐の大

四三〇 三日介内藏忌寸繩麻呂館宴樂時大

伴家持作歌一首

四三一 同日掾久米朝臣廣繩作歌一首

四三二 遊行女婦蒲生娘子歌一首

四三三 同日酒酣更深鶏鳴内藏伊美吉繩麻

呂作歌一首

四三四 守大伴家持和歌一首

四三五 太政大臣藤原家之縣犬養命婦奉天

皇歌一首

四三六 悲傷死妻歌一首并短歌

四三七 二月二日判官久米廣繩以正税帳應

入京師仍大伴家持作歌一首

四三八 四月十六日大伴家持詠霍公鳥歌一

首

四三九 春日祭神日藤原太后賜入唐大使藤

使藤原の朝臣清河に賜ひて作りませる歌一首

四四一 大使藤原の朝臣清河が歌一首

四四二 大納言藤原の家にて入唐使に餞する歌三首

四四三 天平五年、入唐使に贈れる歌一首短歌并せたり

四四七 阿倍の朝臣老人が、唐に遣されし時、母に奉りて

別を悲しふる歌一首

四四八 七月十七日、越中の守家持が、少納言に遷任せら

れて別を悲しふる歌を作り、朝集使掾久米の廣繩

が館に贈り貽せる歌二首

四四九 八月四日、内藏の伊美吉繩麻呂が館に國の厨の饌

を設けて、大帳使大伴の家持に餞せし時、家持

が作れる歌一首

四五〇 五日平旦、大帳使大伴の家持が、内藏の伊美吉繩

麻呂が盞を捧ぐる歌に和ふる一首

五五一 正稅使掾久米の朝臣廣繩が、事畢り任に退り、越

原朝臣清河御作歌一首

四四二 大使藤原朝臣清河歌一首

四四三 大納言藤原家餞入唐使歌三首

四四四 天平五年贈入唐使歌一首并短歌

四四七 阿倍朝臣老人遣唐時奉母悲別歌一

首

四四八 七月十七日越中守家持遷任少納言

作悲別歌贈貽朝集使掾久米廣繩館

二首

四五〇 八月四日内藏伊美吉繩麻呂館設國

厨之饌餞大帳使大伴家持時家持作

歌一首

五五一 五日平旦大帳使大伴家持和内藏伊

美吉繩麻呂捧盞歌一首

五五二 正稅使掾久米朝臣廣繩事畢退任遇

前の國の掾大伴の池主が館に遇ひし時、久米の廣繩が、萩の花を詠めて作れる歌一首

越前國掾大伴池主館時久米廣繩詠芽子花作歌一首

四三 大伴の家持が和ふる歌一首

四三 大伴家持和歌一首

四四 京に向ふ路上にして、輿によりて、預て作れる侍

四四 向京路上依輿預作侍宴應詔歌一首

宴應詔の歌一首短歌并せたり

并短歌

四五 左大臣橘の卿を壽かむために、預て作れる歌一首

四五 爲壽左大臣橘卿預作歌一首

四六 十月二十二日、左大辨紀の飯麻呂の朝臣の家に宴

四六 十月二十二日於左大弁紀飯麻呂朝

せる歌三首

臣家宴歌三首

四七 壬申の年の亂の平定りし以後の歌二首

四七 壬申年亂平定以後歌二首

四八 閏三月、衛門の督古慈悲の宿禰の家にして入唐の

四八 閏三月於衛門督古慈悲宿禰家餞之

副使同じき胡麻呂等に 餞せる歌二首

入唐副使同胡麻呂等歌二首

四九 高麗の朝臣福信を難波に遣して、肴酒を入唐使藤

四九 高麗朝臣福信遣於難波賜肴酒入唐

原の朝臣清河等に賜へる御歌一首短歌并せたり

使藤原朝臣清河等御歌一首并短歌

五〇 大伴の家持が、詔に應へむために、儲けて作れ

五〇 大伴家持爲應詔儲作歌一首并短歌

る歌一首短歌并せたり